



誌季
能古博物館だより

チカラシバ *pennisetum alopecuroides* (2005.11.12 撮影)

能古島の環境変化 (二)

九州大学生物研究部 有志

□ 能古島の植物と自然環境

これまで能古島に生育する植物のなかですでに記録に載っているものと、今回私たちが調査によ

て確認した植物を合計すると六〇五種(亜種・変種を含む)に及ぶ植物が確認されました。日本に生育する植物が約七〇〇〇種ということを考えてると約1/12にあたり、面積がせまいこの島に、いかに多くの植物が生育しているかという事が分かります。島という限られた環境にこのように多くの植物が生育しているのは、能古島が豊かな自然環境に覆われているからに他なりません。"自然"という

うと、人の手の入らない原生的な環境をイメージするかもしれませんが、決してそうではありません。「思索の森」のような発達した照葉樹の森、人の管理によって成立している田畑・果樹園とその周辺の里山、そして人の影響を最も強く受けている人家周辺や路傍など、様々な環境が能古島には混在

しており植物にとってそれぞれの環境に適応したかけがえのない住処を提供しています。

このような観点から、この島に生育している植物について大きく分けて考えてみると、海岸性の種、山地性の種、里山の種、湿地性の種と四つの環境に依存して生育する種で構成されていることがわかります。ここでは、環境ごとにその特徴と出現する植物について述べてみたいと思います。

海岸

海岸は海風を強く受けるために高木が発達しにくく、多くの種にとって生育は限られ、耐塩性のある植物が生育しています。また、この島は、最高標高も一九五mとそれほど高くないため、全域に渡って福岡県本土の沿海地に生育する種が分布しています。春先の山菜に「ツワ」と称して好まれるツワブキはその最たる例で、島の全域に渡って道路沿いの林縁から照

葉樹林内まで広く見ることができません。

また、海岸近くのみ生育している種としては、砂浜にコウボウムギやコウボウシバ、ツルナ、ハマエンドウなど、崖や岩場にはタイトゴメ、ハマボツス、オニヤブソテツなどが見られます。島に近い博多湾沿岸の都心部周辺では、埋め立て等により自然植生が消滅しているため、このような普通種であっても、多くの海浜植物が残っている能古島の環境は福岡県でも重要であると言えるでしょう。

山地

前述の通り、福岡県本土、海岸近くの低地に生育する植物を能古島では全域に渡って、見ることができません。また、本土では比較的標高の高い地域に生育する植物もまたこの島で少数ながら確認されました。イヌガシ、コバノチョウセンエノキ、サラシナショウマ、シハイスマレ、ヤマネコノメソウなどがこれに当たります。こうした植物の一部には人為的な持ち込みや本土からの風や鳥の種子散布によって能古島に根を下ろしたとは考えにくい種もあるため、それらの来歴は謎に包まれています。遠い昔、能古島が九州本土と陸続きだった頃から、遺存的に生育している種かもしれません。いずれにせよ、本土では山地に分布する植物でも能古島には、生育可能な環境が存在するということが分かります。

里山環境

里山環境と一口に言ってもそこに含まれる環境は様々ですが、ここでは雑木林や草地などの、人によって管理・維持されている環境について記します。定期的に草刈りが行われる林縁や果樹園などの環境は、光がよく射し込み、多くの種類の植物が生育する場所となっています。事実、今回多くの種が出現した林縁や果樹園の道路沿いでは長さ一〇〇m×幅四mの範囲に一〇〇種以上の植物が確認されました。林縁などの環境は道路沿いなど広く島内に存在するため、そこに出現する植物の多くもまた島内全域に渡って分布しています。また、林縁と同様に、島の南部にはナラガシワやクヌギを主体とする雑木林が存在し、照葉樹林と違って冬季でも林内の明るい環境が見られます。こうした環境ではムラサキケマン、シヤク、アオハコベなど春先に開花する植物を多く見ることができません。しかし、かつて主に薪炭材として利用されてきた雑木林は、近年その放棄が進み、林床は暗くなり荒廃の一途を辿っています。

湿地環境（ため池、水田）

湿地とは湿気を帯びた土地のことを指し、そこには低酸素状態、水分過多など特定の環境に耐えうる特殊な植物が生育しています。能古島の土壌は全体的にみると、やや水不足の島という環境ですが、小規模ながらも

ため池や水田など、昔からの稲作によって成り立っている湿地が南部に比較的まとまって分布しています。今回の調査では休耕田にはミクリ、ハッカ、ため池ではヘラオモダカ、ヒメホタルイ、マツバイ、ヒルムシロの一種、ミゾコウジュ、沿海地の湿地ではコウキヤカラ、フトイが観察されました。シロバナサクラタデのように複数の湿地環境に広く生育している種もありますが、ここに列挙した植物種のほとんどは、それぞれの限られた湿地のみで確認された種でした。このことから、能古島においてはある特定の湿地のみの重要性から保全をするということではなく、種構成の異なるそれぞれの湿地全てが、重要であるということを認識しました。これからも大切に守っていききたいものです。



メハジキ *Leonurus sibiricus*

道端や林縁、草地に生える多年草。葉は深く切れ込みがあり葉のつけねに淡紅紫色の花を数個ずつつける (2005.11.12撮影)

チカラシバ (表紙)

道端や草地に多く、能古島でも普通にみられる一年草。容易には引き抜けないことからこの和名で呼ばれている。

植物相調査担当…田金秀一郎、遠山弘法

※次回は「能古島において注目すべき植物」です。

南冥と鎮西の漢詩人(四)

南冥と田能村竹田

その二

神戸女子大学名誉教授

林田愼之助

〈南冥と田能村竹田(二)のあらすじ〉

田能村竹田は、亀井南冥を百道に訪ねた時のことを、「竹田莊師友画録」に書きとめられた。ところが医師には不向きであったとみえ、学問の道にすすみ、『豊後国志』の編纂にたずさわるが、藩の羈絆を脱して風流三昧に生きようと志し、眼疾を理由に京都に遊学。それから六年を経て文化八年、竹田は再び上京。頼山陽、雲華上人らと半生知己の交わりを結ぶ。その当時、山陽は京で私塾を開いていたが、青年の時の放蕩が京でも噂の種となり、鬱々とくらしていた。そこに舞い込んできたのが、肥前の草場佩川からの手紙で、古賀精里に従って対馬へ朝鮮使節の応接に向向くというのが、その内容だった。

古賀精里は寛政異学の禁の立役者の一人である。頼春水、山陽の叔父の尾藤二洲とは、知友の間柄であり、そのときもなお、朱子学

の徒として、幕府の学政をとりしきっていた。

佩川の手紙をみて、さっそく山陽は尾藤二洲をとおして、自分も対馬へ随従させてくれるように、精里に願い出た。ところが、この願い出は、精里によつてにべもなく退けられた。その間の消息については、そのおり、精里が息子の穀堂にあたえた二通の書状が今日のことについて、その中につぶさに伝えられている。実は、精里が山陽の願いを退けた理由に、南冥・昭陽父子の行状がからんでいた。

頼久太郎(山陽)、拙者の供にて、対馬に罷り越し度きの儀、良佐(尾藤二洲)迄、頼み越し申し候。然る処、此の者の放心、能く調いたると、父弟ども申せし儀に候えども、其の著述等の沙汰承わり候処、一向に外馳いたし候て、悔懲内省の心、絶えて相い見えざる候。則ち亀井父子の所為にも格別異ならず候。依りて相い断り申し候。

久太郎の儀、君父に対し、無故大謬妄。其上、今に新設に悔悟の様子之れ無く、人の才を愛するも、程の知れたる事。是れ等と亀井等の如きは、名教の罪人とも申し候。故に縦令驚天動地の名文、之れ有り候うても、甚だ斟酌いたしかね候う儀に候。

まことに痛烈な弾劾である。亀井父子は、頼山陽ともどもに、名教の罪人として断罪されているのである。古賀精里がいかに腐儒であつたかが、この書状一事をもつて知れようというものだ。

寛政異学の禁が発せられて、すでに十八年の歳月が経過しているにもかかわらず、豪然と九州の一角にあつて、古学を樸守してゆぜらない亀井南冥、昭陽にたいして、名教の徒がくだした鉄槌が、これであつた。

古賀精里が穀堂に宛た書状は、父が子にむけての誠の意味を含むだけに、私的な性格をもつ書状という枠をはるかに越えた性格のものであつた。とりもなおさず、私的な書状であることが、かえつて公人精里の偽らぬ本音をあらわしていた。

かく見れば、権力の側にあつて、朱子学を遵守することに、一点の疑いもさしはさまずにきた名教の徒の冷眼に、なおそのときの亀井南冥父子、それに頼山陽がさらされていただけでなく、その徒輩の監視を受けつづけていた事情を、この書状はあますところなく、つたえていた。

次の漢学の世代を担うことになる年若い田能村竹田、雲華上人たちが、南冥にたいして抱いた親近感、いまだ大勢をしめる状況ではなかつた。文化十年、亀門の学統を秋月黒田藩で独り守りつづけていた原古処も、時流に抗しきれず、儒役を免ぜられた。

この原古処の罷免は、秋月に出向くことを唯一の楽しみにしていた南冥には、ひどくこたえた事件であった。その翌年の三月、亀井南冥は焚死した。その焚死にふれて、広瀬淡窓はつぎのように感想している。

南冥先生罪ヲ得テ蟄居シ玉イシヨリ、此ニ至ッテ二十余年。心中憤懣ニ堪エズ、終ニ狂疾ヲ発セラレタリ。予が蟄ニ在リシ時マデハ、唯酒ニ耽リ、佯狂ノ体ニ類セシガ、追々と性理乖錯スルニ至レリ。但事ニヨリ時ニヨリテハ、常人ニカワラザリシナリ。一旦ハ籠居セラレシカ。近來ハ頗ル隠ニシテ起居モ心ニマカセオキタリ。先生ノ隱宅、本宅ノ隣ニアリ。三月二日家人糕ヲツクニヨリテ、炭火多カリシヲ、先生衾炉ノ裏ニ入レオキ、其ノ侍婢モ暫時本宅ニ行キタリ。而ル二人アツテ曰ク、隱宅ヨリ煙多ク出ズルト。昭陽夫妻走り行キテ見玉イシニ、満室ニ火起レリ。昭陽煙火ヲ犯シテ、先生ノ居間ニ至ラレシニ、更ニ人ヲ見ズ。声ヲアゲテ呼ブニ、答フル者ナシ。時二人曰ク、老先生ハ先刻外ニ出玉エリト。昭陽略心ヲ安ンジ。マズ人ヲ走ラシメテ、其居処ヲ尋ネ、其ノ身ハ火ヲ打滅サレタリ。夫レヨリ牆壁ノ焼倒レタルヲカカゲシニ、牆下ニ先生ウツブシテ臥セラレタリ。其ノ身全シテ損ズルコトナシ、息既ニ断エ

タリ。火ノオコリシ所以、知りガタシ。自ラ火ヲ放タレシヤ、自然ニオコリシヤ。自ラ火ニ投セラレシヤ、将タ出デントシテ及バザリシヤ。其ノ説得難シ。其ノ宅四面皆空地ニシテ、火ニトリコメラルベキ様ナシ。然レバ、自ラナセルニ近シ。
〔懷旧樓筆記〕

文化十一年（一八一四）三月二日、南冥焚死す。享年七十二歳の生涯であった。

このとき、田能村竹田三十八歳、すでに官途を離れてから、三年の歳月が経過していた。竹田には、まえまえから宮仕えの羈束を脱し、自由人として思うままに風流の道に生きたいという考えがあつたが、竹田が致仕におよぶ直接の原因には、文化八年の十一月、岡藩におこつた百姓一揆がかかわっていた。

百姓一揆は、岡藩中小姓番頭格で奉行兼用人の要職にあつた横山武昭一派の苛斂誅求の虐政にたまりかねたことに端を発していた。かねがね藩政にたいして革新的な意見を抱いていた竹田は、この機会におのれの政治的抱負を述べた建言書を、その年の暮れに一篇、つづいて翌文化十年二月に第二の建言書を提出した。

竹田は百姓こそ国の宝と考える立場から、この度の騒動が、百姓を仇敵のごとくあつかい、虐政をほしきままにした奉行横山武昭の政治むきに原因があつたと指弾し、百姓一揆

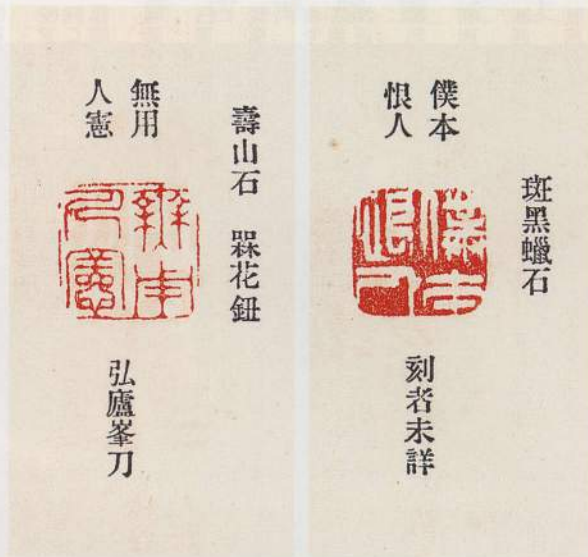
の首謀者を詮議して死罪に処するようなことがあつてはならぬとして、以後政治むきの悪しきところを改め、百姓には仁愛憐愍の態度でのぞむが第一であると建言した。あわせて、茶の湯の流行から、奥むきの筭、建築普請から衣服の好みにまで及ぶ贅沢を廃して、儉約につとめる具体案を展開した。第二の建言書では、藩費由学館の教導の立場から、学館が無用の長物となつていて、学問を役立てる空気が岡藩にはなく、それが仁政の欠如になつて、百姓一揆が発生したと説きおよんだ。

要するに、竹田は藩主にたいして節儉愛民の徳を説き、学政の弛緩による士人の頹廢をつき、一身の危険をも顧みず、面を犯して、諫言したのであつた。

その結果は、たしかに横山一派はおとがめを受け、家禄を召上げられたが、一揆の首謀者もそれぞれに処刑された。しかも藩政改革の建言が実行に移される気配はいっこうになかつた。——竹田は、この岡藩の旧態依然たる実状をみて、隠退の志を決したのである。痼疾静養につとめるといふのが、その理由であつた。

『田能村竹田全集』にのせる竹田印譜をみると、「僕本恨人」「無用人憲」の刻印があるが、藩政改革の志を遂げることなく挫折したのち、風流の道一筋に生きた竹田が内に秘めた無念の思いが、そこに刻まれていたとみてよいであろう。天保五年（一八三四）、五十八歳の竹

田は、その歳の九月、大阪に大塩平八郎を訪ね、二人して口角沫を飛ばして激発の議論を吐いているが、これは詩画風流のことではなく、天下の政治むきについての批判であったと思われる。それから三年のち、乱をおこす大塩平八郎の時世への憤りに、竹田は共感し、ともに議論激発して、快意を感じたのである。



竹田印譜「田能村竹田全集」から

さて、木崎好尚の『大風流田能村竹田』のなかに、竹田が雲華上人に宛た一通の書状が伝えられている。差し出された年代は不明であるが、そこには、「日々寒さになり申し候。

先生御無事のよし、目出度存じ候。我等が儀は今年の寒中は誠に越えかね候。付ては宿の事や、小供の学業、気になり候えども、是れとても思うようなし。〔世の中はなるようにこそならぬもの、死での跡は人まかせなり。〕かくの如く安心致し候」とある。ここで竹田が気にかけている小供の学業とは、竹田の愛息如仙（太一）のことである。

広瀬淡窓の『懐旧楼筆記』によると、文政八年（一八二五）の二月の条りに、「田能村行蔵来り訪エリ。行蔵ハ竹田先生ト号ス。画ヲ善クシ、詩文ニ長ジ、当今第一風流宗匠ナリ。其子太一、予が門ニ入りタル故、数度予が家ニ往来セリ」と記されている。結局、竹田が我が子如仙の学業を託したのは、淡窓の私塾「咸宜園」であった。淡窓の目田は竹田が住む竹田から、九重の山をはさんで、おなじ豊後の内にあつた。こうしたところにも、広瀬淡窓をとおしてではあるが、南冥の亀門学に寄せる田能村竹田の熱い思いは、南冥との初対面以来、変わることもなく持続していたと、私はみたい。

文政八年といえは、淡窓四十四歳、竹田四十八歳のときであつた。竹田が初めて南冥を訪ねてから、その間、すでに二十年ちかい歳月がながれていた。

※次号は大庭卓也氏の「亀井南冥が描いた墨竹」です。

「南冥と鎮西の漢詩人（五）」は五十二号から再び続きます。

事務局だより

当館収蔵の「長垂の鉞物」三百十一点が三月十五日に福岡市の天然記念物に指定されました。日本では長垂山のみに産する貴重な鉞物を始め、すでに江戸時代から「キララ」と呼ばれ福岡城の城壁の一部にも使用されていた長垂山の紫雲母、美しい紅色、藍色のリシア電気石、またそれらの色が溶け合った「ウォーターメロン」と呼ばれる二色電気石など八十三点を展示しています。ぜひ、御覧下さい。

「日に舞うて

凱歌のごとし

鷹柱



能古博物館協賛会・友の会

(敬称略・順不同)

〔法人協賛会員〕

- 浄土真宗本願寺派 浄満寺
- (医)原土井病院
- ワタキョーセイモア(株)
- (株)福岡メディアカル
- リース
- (株)アールアンドエム
- (株)CDS
- 福岡校郵便局
- 鬼駝信孝
- 福岡赤坂郵便局
- 戸田正義
- 日清医療食品(株)
- 福岡支店
- 福岡経営
- 管理センター
- (株)サンコー
- (株)恵光会 原病院
- (株)西日本シティ銀行 和白支店
- (株)西日本シティ銀行 千代町支店
- (株)西日本シティ銀行 香椎支店
- (株)西日本シティ銀行 土井支店
- (株)西日本シティ銀行 福岡流通センター支店
- (株)西日本シティ銀行 新宮支店
- (株)西日本シティ銀行 箱崎支店
- (株)西日本シティ銀行 久山支店
- (有)サンネット
- (株)福砂屋
- (医)笠松会有吉病院
- (有)ウエダ建築社
- 九州防災工業(株)
- (有)西エレベーター
- サービス
- (有)豊友設備
- 総合産業(有)
- (株)ニッコク・トラスト
- (株)メイデン
- ダイヤアド(株)
- (株)ホスピカ
- ギヤラリー倉
- (医)大乗会福岡原リハビリ
- テーシヨン病院
- (医)江頭会さくら病院
- (株)二子口九州支社
- 宗教法善隣教
- (株)リコー商会
- (株)橋本組
- 下山工業(株)
- 学校法人原学園
- (協)唐人町プラザ甘棠館
- 大和産業(株)福岡支店
- 社会福祉法人
- 福岡ひまわりの里
- 大成印刷(株)
- (株)ホームケアサービス
- 能古映画サークル
- 能古岩至商会
- 特別養護老人ホーム なごみの里
- エームサービス(株)
- (株)センタービジネス
- (有)トータル・サポート
- コーポレーション
- 社福多々良福祉会

御寄付者芳名

岡部六弥太文学碑建立有志一同 田中淑子様

「ありがとうございました」

〔協賛会会員〕

- 松本盛二 ③
- 南誠次郎 ⑮
- 中山重夫 ⑪
- 菅直登 ⑧
- 早船正夫 ⑮
- 岡部六弥太 ⑮
- 笠井徳三 ⑦
- 安陪光正 ⑤
- 亀井准輔 ⑮
- 石橋親一 ⑫
- 木原敬吉 ⑧
- 原田國雄 ⑦
- 森光英子 ⑧
- 永井功 ⑦
- 緒方益男 ⑦
- 山本稔 ③
- 武内隆恭 ②
- 白水義晴 ⑧
- 石野智恵子 ⑮
- 翠川文子 ⑫
- 多々羅節子 ⑮
- 熊谷豪三 ⑥
- 有江勉 ①
- 山崎拓 ①
- 七熊太郎 ⑦
- 片桐寛子 ⑦
- 西村俊隆 ⑥
- 明石散人 ⑦
- 矢部俊幸 ③
- 上原孝正 ③
- 早船真一 ④
- 西方俊司 ⑤
- 亀井千秋 ④
- 土生借子 ①
- 藤井鉄夫 ②
- 添島律子 ③
- 永野豊 ①

〔友の会会員〕

- 伊藤茂 ⑪
- 水田和夫 ⑥
- 木戸龍一 ⑩
- 星野万里子 ⑧
- 吉村雪江 ⑧
- 安松勇一 ⑪
- 上田良一 ⑦
- 高田浩二 ⑨
- 桑野次男 ⑧
- 藤木充子 ⑫
- 和田宏子 ⑬
- 行成静子 ⑫
- 片岡洋一 ⑮
- 石川文之 ⑧
- 都筑久馬 ⑦
- 横山智一 ⑧
- 宮崎清子 ⑩
- 西崎集 ⑦
- 岡本政蔵 ⑦
- 三宅金蔵 ⑦
- 星野金子 ⑦
- 林十九楼 ⑭
- 織田徹男 ⑮
- 上田博 ⑮
- 鶴田又三子 ⑦
- 塚本美和子 ⑥
- 伊藤康彦 ⑤
- 寺岡秀実 ④
- 原田種美 ⑤
- 石橋清助 ⑤
- 井上敏枝 ⑭
- 隈丸清次 ⑦
- 吉富とき代 ⑤
- 大山宇一 ⑥
- 葉山政志 ⑪
- 川島貞雄 ⑫
- 岸芳正隆 ⑭
- 久芳洋三 ⑭
- 半田耕典 ⑥
- 莊田雅敏 ⑥
- 吉田洋一 ⑤
- 永岡喜代太 ⑫
- 神戸純子 ④
- 渡辺美津子 ⑤

- 山田博子 ⑫
- 佐藤泰弘 ⑥
- 前田静子 ④
- 飯田晃 ⑤
- 神里朝男 ③
- 吉田一郎 ①
- 池田修三 ⑪
- 岩谷正子 ③
- 小川正幸 ②
- 権藤菊朗 ②
- 増田義哉 ④
- 宮嶋熊太郎 ①
- 土井千草 ④
- 松坂洋昌 ④
- 稲永実 ①
- 鹿毛博通 ④
- 古川映子 ⑪
- 衛藤俊規 ⑧
- 伊藤泰輔 ⑧
- 西村蓬頭 ⑧
- 執行敏彦 ④
- 渡邊千代子 ②
- 後藤和子 ⑦
- 脇山浦一郎 ⑪
- 川浪由紀子 ⑩
- 上田啓治 ③
- 足達輔治 ⑥
- 中村ひろえ ⑨
- 古賀謹二 ⑦
- 野尻敬子 ③
- 大野正治 ⑨
- 柳田正巳 ⑨
- 青木良之助 ⑨
- 神崎憲五郎 ⑦
- 金子柳水 ⑩
- 佐野親至 ⑧
- 井手親栄 ⑩
- 宮崎春夫 ⑦
- 山崎工ツ子 ④
- 小山元治 ⑧
- 古瀬宗雄 ⑬
- 西山正昭 ⑨
- 市丸喜一郎 ⑫

- 豊島嘉穂 ②
- 守瀬孝二 ①
- 鎌田祥子 ⑥
- 甲本達也 ⑬
- 田本政宏 ⑥
- 大塚博久 ⑤
- 辻本雅史 ⑦
- 松田清 ⑧
- 杉浦五郎 ⑦
- 中野晶子 ⑩
- 大谷英彦 ⑤
- 野崎逸郎 ⑪
- 住本謙也子 ⑮
- 前田敏也子 ⑮
- 村山吉廣 ⑬
- 住本直之 ⑥
- 間所ひさ子 ⑮
- 伊藤英邦 ①
- 鹿毛光子 ①
- 林正孝 ③
- 井上雷策 ②
- 田中寛治 ②
- 土屋伊雄雄 ①
- 白井京子 ⑦
- 原礼子 ①
- 小堀百合子 ①
- 原康二 ①
- 杉みどり ⑧
- 山下清久 ②
- 杉原正毅 ⑨
- 大久保昇 ⑨
- 福澤昌弘 ②
- 小嶋幸雄 ⑧
- 福本孝行 ⑦
- 樋口陽二 ②
- 木下淳 ②
- 酒井カツヨ ⑧
- 島義博 ⑧
- 田上紀子 ⑧
- 中畑孝信 ⑧
- 西島道子 ⑮
- 西嶋洋子 ⑧
- 村上靖朝 ⑧
- 嶽村光男 ⑧
- 木原光男 ⑥
- 鈴木惠津子 ⑥
- 富永紗智子 ⑦
- 吉村陽子 ⑦
- 松本陽一郎 ⑦
- 石橋善弘 ⑧
- 徳重認 ①
- 岸本雄二 ③
- 武田正勝 ②
- 武田初代子 ②
- 近藤克文 ⑧
- 西嶋雄司 ⑨
- 榊島政信 ③
- 上杉和稔 ①
- 富田英寿 ⑥
- 野上哲子 ①
- 益尾天嶽 ①
- 石橋正治 ①
- 小橋正文 ①
- 亀石正之 ②
- 藤田一枝 ②
- 松尾清美 ③
- 蓮尾正博 ③
- 森祐行 ⑦
- 吉安蓉子 ⑥
- 村上牧一 ⑦
- 小谷修一 ⑦
- 阿部昌弘 ⑤
- 結城進 ③
- 永石順洋 ⑥
- 重松史郎 ②
- 亀井勝夫 ②
- 岸川龍一 ①
- 山本光玄 ④
- 吉開史朗 ④
- 香立スミエ ①
- 藤瀬三枝子 ④
- 野見山実子 ⑥
- 頃末隆英 ②
- 友原静生 ②
- 森口智子 ⑥
- 山本信行 ①
- 井上陽一 ⑤
- 寿美電気 ⑤
- 矢野鈴子 ⑤
- 藤崎和子 ⑤
- 宮崎正直 ⑦
- 原田雄平 ⑤
- 山本薫 ③
- 高根幸子 ③
- 高根襄 ③
- 柴田優美 ②
- 谷口澄江 ②
- 石橋順子 ④
- 西原正俊 ②
- 松熊友彦 ④
- 小川敦代 ④
- 木皿義憲 ①
- 矢野敏子 ③
- 丸山敏子 ③
- 江崎小二郎 ②
- 佐藤洋子 ②
- 稲永カヲ子 ②
- 的野彰 ①
- 高田久美子 ①
- 森山純子 ②
- 小山保彦 ①
- 小山勝子 ①
- 側嶋眞智子 ①
- 筑紫咲子 ①
- 其原俊一 ①
- 小山富夫 ①
- 江原幸雄 ②
- 中山隆史 ②
- 小川道博 ②
- 瀬野雄子 ②
- 有吉キヌ子 ①
- 箕原聡 ①
- 生田幸一 ①
- 森田英子 ①
- 西山紀子 ①
- 瀬戸美都子 ②
- 池松幾生 ①
- 立石京一 ①
- 杜あとも ①
- 小山田公子 ①
- 服部たか子 ①
- 田代朝子 ①

●能古博物館ご案内●

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)

休館日 12月1日~2月末日の冬季のみ休館

入館料 大人400円・高校生以下無料

交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)
→能古(徒歩10分)→博物館

〒819-0012 福岡市西区能古522-2

☎(092) 883-2887

FAX(092) 883-2881

HP <http://www.nokonoshima-museum.or.jp>

E-mail info@nokonoshima-museum.or.jp

※新規の御加入(先号以後、平成19年3月25日現在)を、記載いたしておりますので、何卒ご芳名をご確認ください。ありがとうございます。

自然と文化の小天地創造

能古博物館の会

協賛会(個人年間1万円(何口でも可))
〃(法人年間3万円(何口でも可))
友の会年間3千円(何口でも可)

(館の活動、館誌購読と催事企画に参加)

〔館維持、資料収集、施設整備等の資金援助を受ける〕

納入方法 郵便振替 〇1730960970

財団法人 能古博物館

右の会費受領は、その都度本誌に掲載、以後会費相当期間を名簿にします。